交通のご案内

交通アクセス

- 近鉄伊勢中川駅東口から、平日のみ三雲地域コミュニティバス「たけちゃんハートバス」(9人乗り)を運行(4キロ)。松浦武四郎記念館停留所下車すぐ
- 近鉄伊勢中川駅東口からタクシーにて7分
- 伊勢自動車道　久居ICまたは一志嬉野ICから車で各8キロ(15分)

※大型バスで中勢バイパスを利用してお越し頂く場合は、「嬉野新屋庄ランプ」からお越し下さい。

休館日

- 毎週月曜日(祝日の場合は開館し、翌火曜日を休館)
- 祝日の翌日(土日の場合は開館)
- 年末年始(12月29日から1月3日)

※上記のほかに臨時休館する場合があります。

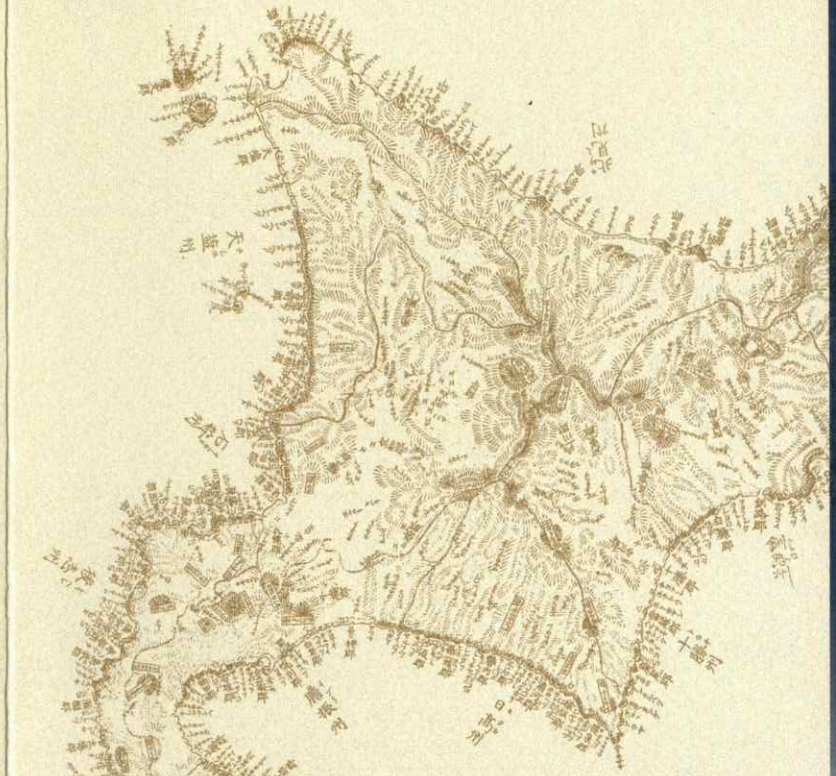
開館時間　9時　～16時30分

入館料

区分	松浦武四郎記念館			共通券(松浦武四郎記念館と松浦武四郎誕生地)
	一般大人	6歳以上18歳以下	5歳以下	一般大人
個人	360円	230円	無料	410円
団体	230円	120円		290円
年間パスポート	1,100円	660円	※発行日から1年間有効	

※団体は20名様以上　※松浦武四郎誕生地は18歳以下の方は無料
※障害者手帳をお持ちの方及び付添者1名は無料

北海道の名付け親
松浦武四郎記念館



〒515-2109　三重県松阪市小野江町 383
TEL 0598-56-6847　FAX 0598-56-7328
松浦武四郎記念館　検索　https://takeshiro.net

江戸時代はるか北方を
めざし真摯なまなざしで
真実を見つめた男がいた。

幕末から明治維新に活躍した松浦武四郎は、生涯にわたり全国を歩き続ける。
旅行家・探検家、作家、出版者、学者・・・
たぐいまれなる知識欲と冒険心で、多芸多才ぶりを発揮したが、数々の業績の中で人びとの記憶に刻み込まれているのは、「北海道の名付け親」であること。
さまざまな価値観を受け入れる広い心、偏見を持たない眼、常に先を切り拓く力・・・
武四郎の道は未来へとつづく。

三重県松阪市が生んだ偉人

1818～1888年

松浦 武四郎

まつ うら たけ し ろう

松阪市指定史跡「松浦武四郎誕生地」
※記念館から徒歩7分(500m)

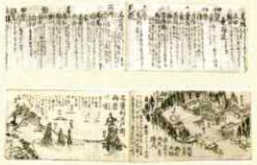
松浦武四郎記念館では、重要文化財1505点、三重県有形文化財223点を収蔵し、平成6年の開館以来、松浦武四郎に関する資料の収集保管、調査研究、展示公開、教育普及などの博物館活動をおこなっています。展示室では2ヶ月に一度、展示資料を入れ替え、さまざまな顔をもつ武四郎の姿を紹介しています。

略年譜　松浦武四郎の生涯

1818年(　1歳)	2月6日、伊勢国一志郡須川村(今の松阪市小野江町)に生まれる
1830年(13歳)	津藩の学者平松楽斎の塾で学ぶ
1833年(16歳)	江戸に行き、山口遇所に篆刻を学ぶ
1834年(17歳)	全国各地を巡る旅に出る
1836年(19歳)	四国八十八ヶ所の霊場をすべてまわる
1839年(22歳)	長崎で出家して平戸の千光寺などで僧侶を務める
1842年(25歳)	朝鮮半島へ渡ろうとし、対馬まで行くが鎖国によりあきらめる
1843年(26歳)	長崎でいろいろな人と交流し、ロシア南下による日本の危機を知る 蝦夷地(今の北海道)へ渡ることを決意、9年ぶりに実家に戻る
1844年(27歳)	蝦夷地をめざして青森まで行くが、旅人への取締りが厳しく断念
1845年(28歳)	初めて蝦夷地に渡り、太平洋沿岸を歩き知床岬の先端に到達
1846年(29歳)	2回目の蝦夷地探査で樺太(サハリン)を調査 冬至の日に江差で頼三樹三郎と「一日百印百詩の会」をおこなう
1849年(32歳)	3回目の蝦夷地探査で国後島や択捉島などを調査
1850年(33歳)	1～3回目の調査成果をまとめた記録が完成
1853年(36歳)	吉田松陰ら志士と海防問題を語り合う
1854年(37歳)	宇和島藩の依頼で下田滞在中のペリー一行の動向を探る
1855年(38歳)	幕府から「蝦夷地御用御雇入」の命を受ける
1856年(39歳)	4回目の蝦夷地探査で北海道の海岸線と樺太を調査
1857年(40歳)	5回目の蝦夷地探査で石狩川・天塩川の流域を調査
1858年(41歳)	6回目の蝦夷地探査で北海道の海岸線と十勝・日高地方、道東を調査
1859年(42歳)	4～6回目の調査の記録を幕府に提出、蝦夷地の詳細な地図・アイヌ文化を紹介する本などを出版、この年結婚する
1860年(43歳)	1864年までの間、蝦夷地の様子をわかりやすくまとめた紀行本を出版
1868年(51歳)	明治政府から「徴士箱館府判官事」(箱館府判府事)に任じられる
1869年(52歳)	現在の北海道の名前や郡名の元となる案を考える
1870年(53歳)	開拓判官に任命、従五位に叙せられる 開拓使を辞職、従五位を返上する
1885年(68歳)	これ以降、各地を旅し、古物収集や天神信仰をおこなう はじめて大台ヶ原に登り登山記を出版
1886年(69歳)	2回目の大台ヶ原登山
1887年(70歳)	3回目の大台ヶ原登山、西日本各地を巡り、富士山に登る 全国の古社寺などから古材を取り寄せ、自宅に畳一畳の書斎を作る
1888年(71歳)	2月10日、東京の神田五軒町にあった自宅で亡くなる 浅草称福寺にお墓がつくられる(後に染井霊園に移される)
1889年	遺言により大台ヶ原に追悼碑(分骨碑)が建てられる

諸国を遊歴する　16～26歳

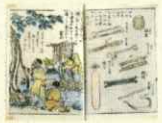
16歳で初めて旅に出て、その後は全国各地を旅し、名所旧跡を訪ね、霊山へと登る。九州から中国・インドを目指したが、鎖国のため断念。長崎でロシア南下の危機を知り、蝦夷地(現在の北海道)を目指すことを決意する。



武四郎の旅のメモ
(20歳頃)
各地の名所・旧跡の様子を、スケッチを添えてメモしながら歩いた。

蝦夷地の探査　28～41歳

28歳で初めて蝦夷地を探査。41歳まで6度に及ぶ詳細な調査は、アイヌ民族の協力を得て行われた。その成果は151冊の調査記録にまとめられ、紀行本や地図を出版し、蝦夷地の地理や、アイヌ文化を伝えることにも努めた。



蝦夷漫画 1859年刊
アイヌ文化のミニ百科事典

北蝦夷余誌 1860年刊
アイヌ民族の案内で樺太を探査する武四郎

北海道の名付け親に　51～53歳

大久保利通の推挙により、明治維新に開拓使の判官を務める。道名、国名、郡名をアイヌ語の地名に基づいて上申し、アイヌ民族を指す古い言葉「カイ」を用い、「北のアイヌ民族が暮らす大地」という思いを込めた「北加伊道」から「北海道」の名が誕生した。

北海道道名撰定上申書
1869年
武四郎が考えた道名案の中に「北加伊道」の名がみえる

趣味に生きた晩年　54～71歳

晩年の武四郎は、各地を歩き、古物を収集し、天神信仰をおこなった。68歳から70歳にかけては、三重と奈良の県境にそびえる大台ケ原に登り、70歳で富士山に登って、71歳で旅に生きた生涯を閉じた。

一畳敷の書斎
(写真提供:国際基督教大学)
全国から贈られた古材で組み立てられた畳一畳の書斎東京都三鷹市の国際基督教大学に現存

丙戌前誌 1886年刊
大台ヶ原に登る武四郎

交通のご案内

※誕生地前の道路（伊勢街道）は細く、駐車場も限りがあります。

松浦武四郎記念館からは500m（徒歩約7分）ですので、歩いてご散策ください。

交通アクセス

- 近鉄伊勢中川駅東口から、平日のみ三雲地域コミュニティバス「たけちゃんハートバス」（9人乗り）を運行（4キロ）。松浦武四郎生誕地停留所下車すぐ
- 近鉄伊勢中川駅東口からタクシーにて7分
- 伊勢自動車道　久居ICまたは一志嬉野ICから車で各8キロ（15分）

※大型バスで中勢バイパスを利用してお越し頂く場合は、「嬉野新屋庄ランプ」からお越し下さい。

休館日

- 毎週月曜日（祝日の場合は開館し、翌火曜日を休館）
- 祝日の翌日（土日の場合は開館）
- 年末年始（12月29日から1月3日）

※上記のほかに臨時休館する場合があります。

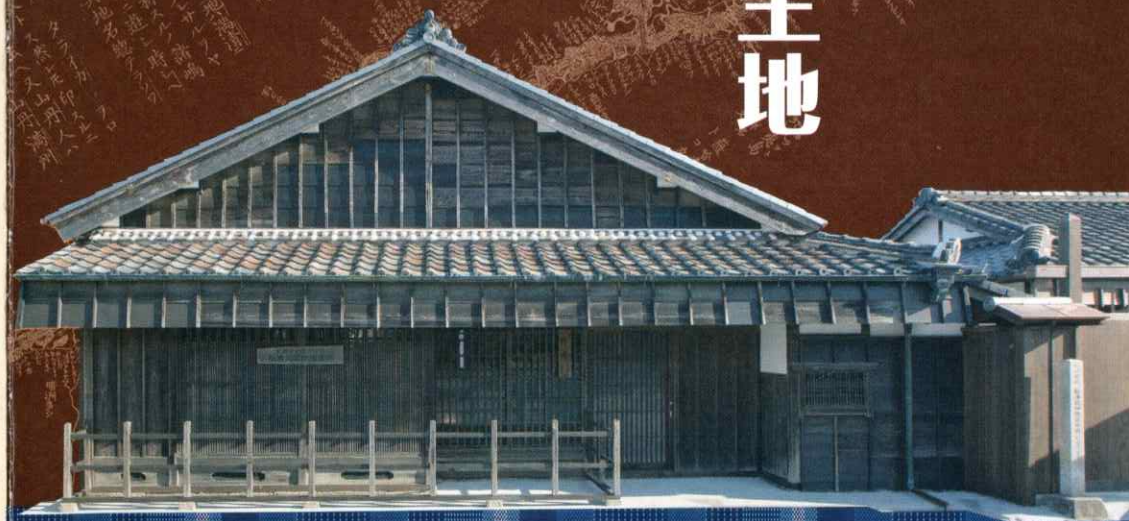
開館時間　9時30分～16時30分

入館料

区分	松浦武四郎生誕地		共通券（松浦武四郎誕生地と松浦武四郎記念館）
	一般大人	18歳以下	一般大人
個人	110円	無料	410円
団体	80円		290円

※団体は20名様以上　※18歳以下の方は無料
※障害者手帳をお持ちの方及び付添者1名は無料

松阪市指定史跡
松浦武四郎誕生地



〒515-2109　三重県松阪市小野江町 321
TEL 0598-56-6847　FAX 0598-56-7328

松浦武四郎記念館　検索　https://takeshiro.net

松阪市指定史跡　松浦武四郎誕生地

松浦武四郎の旅はここからはじまった

幕末から明治維新を生き、「北海道の名付け親」となった松浦武四郎の実家にあたる場所で、昭和37年（1962年）11月15日に三雲村が史跡に指定しました。

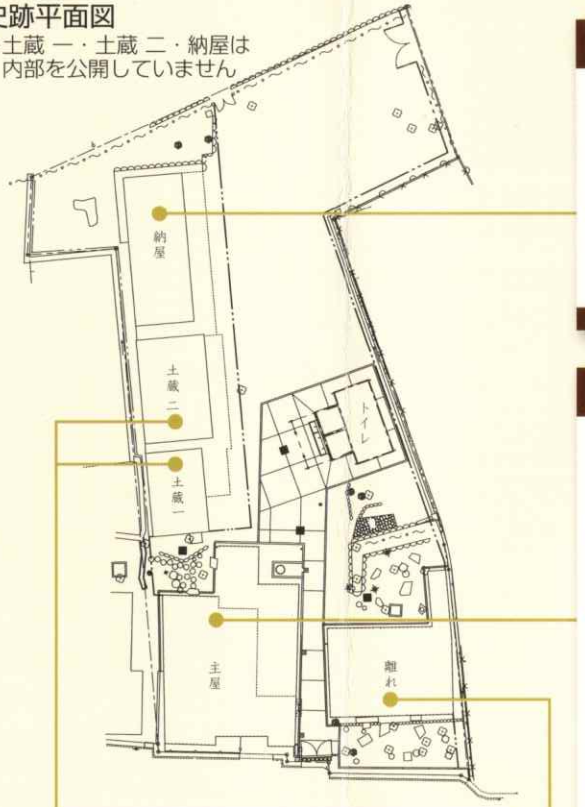
誕生地の前の道は「伊勢街道」といい、南に行けば伊勢神宮へ、北へ行けば四日市の日永で江戸と京都を結ぶ「東海道」につながり、古くから多くの「おかげ参り」の旅人が行き交った道でした。

この道を歩く旅人は、武四郎が13歳の頃に起こった「文政のおかげ参り」で、1年に400～500万人に上ったとされ、武四郎は街道を歩く多くの旅人に刺激を受け、旅を志すようになっていったと考えられます。

武四郎にとって、生まれ故郷の我が家であり、今も武四郎の旅を語る上で重要な場所であるとともに、伊勢街道の宿場町として賑わっていた頃の建物の様子を知る上でも貴重です。

松阪市では武四郎が生誕200年を迎える平成30年（2018年）2月に合わせて、史跡整備を進め、明治維新直前に作られた家相図に基づき、武四郎が生きた時代の建物構成である、「主屋」、「離れ」の保存修理と、土蔵2棟、納屋の補強工事を行いました。

史跡平面図
※土蔵 一・土蔵 二・納屋は内部を公開していません



納屋 なや

農具や釜、桶などのたくさんの生活道具が収納されており、かつては運んできたお米を保管しておく場所でもあり、米蔵とも呼ばれました。

主屋 しゅおく・おもや

松浦家の生活の中心となる建物で、武四郎の父・松浦時春には末っ子であった武四郎のほかに、三人の子どもがおり、武四郎の兄・佐七が家督を継いでからは、武四郎の父母や、兄・佐七の家族が暮らしてきました。

ほとんどの部分が建築当初のままでしたが、後に住みやすいよう増築・改築が繰り替えされてきたため、保存修理を行う際に「かまど」など家相図に基づいて武四郎の生きた時代の姿に一部復元をしています。

※松浦 武四郎（まつうら たけしろう 、1818～1888）

江戸時代後期の文化15年（1818年）に三重県松阪市小野江町（当時は伊勢国一志郡須川村）で生まれ、17歳から全国を巡る旅に出て、明治21年（1888年）に71歳で亡くなるまで、沖縄以外の日本各地を歩いた「旅の達人」とも言える人物です。

幕末にロシアとの緊張関係にあった蝦夷地（今の北海道）を6回にわたり探査し、その成果として詳細な調査記録と地図を残したほか、明治維新には、政府で開拓使の判官を務め、北海道の名前につながる道名や国名・郡名などの撰定に携わったことから、「北海道の名付け親」と呼ばれています。

土蔵 一 どぞう いち　土蔵 二 どぞう に

明治時代に建てられ、長らく武四郎に関係する資料が多数保管されてきました。

離れ はなれ

武四郎の実家を訪ねて来たお客さんをおもてなしする場所として、慶応3年（1867年）頃に完成しました。

離れの庭には、明治維新に開拓使で判官を務めた武四郎が建てた灯篭があります。

※建物は貸切でもご利用可（要予約・使用料）